

ユスト高山右近の生涯と信仰 最終回

マニラへ、そして帰天

慶長19（1614）年11月7日に、三隻のジャンク船（中国製帆船でヨーロッパの貿易船より小型の船）がマカオに、そして、翌8日には二隻のジャンク船がフィリピンのマニラに向けて出港しました。マニラ行きの小さな老朽船一隻に、高山右近の家族をはじめ宣教師たち350人が乗り込みました。

右近たちが乗った船は、船底に穴が開いており、船室に入りがきらず甲板や通路にあふれているひどい状況でした。しかも船足は遅く、普通の船なら10日程で到着するはずが、ひと月余りもかかってしまったのです。

追放者たちは、厳しい環境の中よく耐え忍んでいたのですが、衛生状況が悪くとうとう病人が出て、4人が亡くなりました。病を抱えた右近も船底の隅で祈りと読書にふけりながら耐えていました。

長くてつらい船旅の終わりに、最後の大きな時化に遭遇してしまいました。ジャンク船は波に翻弄され、木の葉のように揺れ、船室に海水が入り沈没寸前にまで達しました。右近の荷物も全て水浸しになってしまいました。

難を逃れて海が凪ぐと、右近は孫たちの手を借りて濡れた書物を甲板に運ばせ、一枚一枚頁をめくって日干しにして乾かしました。その書物は長崎で求めたもので、右近の信仰を導く指南書だったのです。

この嵐の中でずぶぬれになった右近は、一時的にこの危険にさらされるほどの高熱を出し、すっかり体力を失ってしまいました。

金沢にいた時から高齢による病を抱えていた右近は、今回の長旅と船中での高熱、慣れないフィリピンの気候や食べ物、マニラ到着後まもなくして重い熱病にかかってしまいました。総督やイエズス会の神父たちは、手を尽くして必死に介抱しましたが、日に日に容態は悪くなるばかりでした。

自分の死期が近いことを悟った右近は、霊的指導司祭のモレホン神父を病床に招きました。そして、このように心の内を明かしました。「私には自分の死が近づいていることが分かります。しかし、家族や日本から苦勞をともしてきた人たちを悲しませないように、なんとか隠しています。死は神の思召しでありますが、このように神父様に付き添っていただいて死を迎えることができるのは、最高の喜びであり、本当に満足しています。総督、大司教、修道会士、国会の議員の皆様から受けた好意と名譽に深く感謝しています。お伝えください。妻や娘や孫たちについては、心残りはありません。この地までは従ってくれた愛情に感謝しています。神への信仰のゆえに追放されてこの地で来たのですから、これからは神自身が彼らの父親となってくださることをしよう。それゆえ何の心配もありません」。

右近は最期の時まで、明晰な理性を保ち、神への祈りの時間を過ごしていました。病気が悪化すると、病者の塗油の秘跡を受け、最後の整理をし、家族に向けた遺書をしたためました。いよいよ呼吸が浅くなり始めると、右近は家族を枕元に呼び寄せ、「これから先、どんなことがあっても信仰を失わず、悪魔の働きに屈せず、神の教えに従って生きてゆきなさい。家族の中から、もし一人でも神の教えに反する者が出たなら、誰かがその者をすぐに正しい道に連れ戻すように」と言い残しました。

家族が泣き出すと、右近は静かに目を開き、「なぜ泣くのか。これまでどおり、神がお前たちを守り、お前たちの本当の親になつてくださる。さあ、勇気を出しなさい」と諭しました。こうして、1615年2月3日、右近は家族と内藤如安、モレホン神父に看取られながら、静かに63年の人生に幕を降ろしました。日本の多くの殉教者と同じく、最後の言葉は「イエスマリア」の御名でした。

マニラ中の教会の鐘が鳴り響き、右近の死を知らせました。人びとは追放の地でその務めを終えた右近を慕い、涙を流しました。遺体は、フィリピン総督官邸に移され、武士の正装に身を包み、日本式に整えられた広間に安置されました。官邸に入る弔問客は絶えることがなく、殉教者に対する敬意をもって右近の足に口づけをして別れを惜しまました。

右近が日本でミゼリコルディア（慈悲）の組の世話役だったことを知っていたマニラの組の会員は、棺をサンタ・アンナ聖堂まで運びました。右近との別れの儀式は、9日間も続きました。

おわりに

長期間、連載してきました。最後までお付き合いいただいたことに感謝します。

振り返ってみると、ユスト高山右近は、生涯一信仰者でした。その右近を神は選んで、殉教へと導きました。その選びに感謝したいと思います。ユスト高山右近の列聖まで、どうか祈り続けていただきますよう、心からお願ひ申し上げます。

4月から、NHK文化センター梅田教室にて、右近についての講座（6回シリーズ・オンライン）が始まります。ぜひ、そちらも視聴ください。ありがとうございました。

「生かろ」―難民移住者

隔ての壁を取り壊す

松本さん（仮名）の娘は、この春小学一年生になります。そこで松本さんは、校費引き落としに使う口座を開設しに学校指定のJ銀行へ行きました。



奥の四半に通された松本さん

から」でした。友人が「だから私がそばで通訳している」と言いました。あなたが6年間付き添うわけではない」と断

松本さん（仮名）の娘は、この春小学一年生になります。そこで松本さんは、校費引き落としに使う口座を開設しに学校指定のJ銀行へ行きました。

窓口の銀行員は、松本さんが提示した在留カードを見て、日系人の彼女の家族構成や来日の経緯など執拗に尋ねてきました。同行通訳した友人が「口座開設と関係がない」と抗議しても銀行員は更に保険証のコピーを取り、入管（入国管理局）や市役所、小学校にまで電話をした挙句、「口座開設不可」としました。その理由は「日本語ができない

J銀行に問い合わせてみました。電話に出た支店長は「ペルーの人間には年に一度通帳管理をする必要があるが、在留期間があと一年なので断つた」「松本さんとは意思疎通ができない」と窓口の銀行員の方がおっしゃったので不可とした「など」と耳を疑う発言を次々にし、こちらの話を遮って「当行の判断だ」を繰り返しましたので、私は「では本店に確かめます」と言って電話を切りました。ことの経緯を知ったJ銀行本店の人は「あつてはならない対応です」と驚きを隠せない様子で非礼を詫び、「在留カードで中長期滞在者である」と確認し、使途も校費引き落としであれば問題は「ない」との回答でした。

翌日、私は松本さんを連れてJ銀行支店に行きました。松本さんのそばには通訳の友人と小学校の事務の人が付き添いました。校長先生が「言葉の壁で手続きが困難な保護者のために小学校は喜んで協力する」とJ銀行に言われたそうです。松本さんは支店長代理から謝罪され、丁寧に口座開設の手続きを受けました。

「カテキズムの学び」

第32回「姦淫してはならない」(前半)



十戒の第6の掟である「姦淫してはならない」の前半を、1月27日に学びました。講座の様子は右上のQRコードから視聴できます。

カテキズムのこの部分には具体的な倫理規定が示されていますが、その大前提が最初に説明されています。それは、「神は人を創造された日、神に似せてこれを造られ、男と女に創造された。」(創世記5・1～2)ということです。さて、私たちのどこが神様と「似ている」のでしょうか？

神は男と女に人類を創造されて、男女に等しい人格的な尊厳を与えてくださっています。男性と女性は、いずれもペルソナである神にかたどって、その似姿として造られたのですから、ペルソナとして平等な存在です。(2334番)

知性と意志を持つ独立した人格(神の場合は位格)というペルソナであるという点で、神と人とは似ている存在なのです。これは、靈魂における特質ですので、天使もまた神に似たペルソナを持つ存在です。ところが、人間には天使でさえ真似ができない神と似ているもう一つの点があるのです。

結婚による男女の結合というものは、創造主の惜しみなく与える心と生み出す力とを肉体において模倣する一つのあり方なのです。(2335番)

男性と女性という体を持っているからこそ、「両性の間の補完性、依存性、そして相互扶助」(2333番)を通して、相手に惜しみなく自己を与えるという愛の本質の実現と、人間を創造された神の業を継続していくことができるのです。

人間の本質である神と似ているこのような点から、「姦淫してはならない」の具体的な規定である、自慰・私通・ポルノ・売(買)春・強姦・同性愛行為の禁止などを理解する必要があります。

愛はすべての徳の基礎となるものです。貞潔は愛の影響のもとに、自分を与えることを学ぶ手段となります。自制することは自分を与えることにつながっていきます。貞潔を実践する者は、隣人に対して神の忠実さといつくしみの証人となっていきます。(2346番)

(文 酒井俊弘補佐司教)